

通常学級における特別支援教育の実際

浜松養護学校 特別支援教育コーディネーター 和久田 学

通常学級の生徒のうち、アスペルガー障害、AD/HD（注意欠陥・多動性障害）、学習障害の子供が6%にのぼるとの調査があるように、どの学校のどの学級にも特別な支援が必要な子供が当たり前存在する。特別支援教育への流れの中で、そうした子供たちへの支援が大きな課題となっていることを受け、特別支援教育の先進国、アメリカの現場から学ぶことにした。

メリーランド州のハワードカウンティとヴァージニア州のチェスターフィールドカウンティでは、通常の小中学校で行われているIEP（個別の指導計画）に基づいた特別支援教育を視察したが、子供たちの教育的ニーズに合わせ、大胆なカリキュラム、支援方法を取り入れていることに驚いた。

障害の克服を求めるのではなく、障害そのものを特性と捉え、より良い付き合い方を学ばせる。従って、支援を受けることは恥ずかしいことではない。障害があるのなら、それを補う手段を持てば良い。だから支援をする側もされる側も明るくて、前向きだ。子供たちの中に、他人と自分の違いを認める雰囲気があり、実際に、子供たちが友達の障害についてまとめたレポートを見せてもらった。

メリーランド州のケネディクルーガー学校は、軽度発達障害のある者に特化した学校である。そこには臨床心理士、スピーチセラピスト、ケースワーカーなど、多様な専門家と教師とで行われて



ケネディクルーガー学校 高機能自閉症児に対する小グループでの指導

いる、見事にシステム化された特別支援教育があった。

問題行動への対応、認知発達のプログラム、コミュニケーション指導など、ここでのプログラムは様々だが、それら全てがシステムの中に位置づけられている。教師個人の技術や知識に頼るのではなく、組織の中で分担と責任が明らかにされているところに、彼らの特別支援教育がすでに特別なものでなくなっていると感じた。

文化の違いはある。だが、学ぶべきことは多い。

障害を含め、違っているのが当たり前だと胸を張って言える土壌を作り、違いに対応するシステムを構築する。そのための第一歩として、私は特別支援教育コーディネーターとして、様々な場面を通じ、この研修で学んだことを伝え、実践に生かそうと考えている。